

本欄は「新聞を読んで」だが、仕事柄、三十数年携帯ラジオを離せないでいる。若者は新聞よりもテレビ、テレビよりもネット、ネットよりも携帯の時代だろうが、速報性に富む携帯ラジオは手軽だ。テレビも「聞ける」し、地方に行ってもワンタッチでローカル局を選択してくれる。

さて、そのラジオ。十八日召集された通常国会の中継を聞いていると、ドラマ「ガリレオ」(フジテレビ)ではないが「実に面白い」。何故かと言つと、委員会審議での不規則発言と、それに続く「速記を止めてください」の声。平たく言えば、ヤジが飛び交う国会の臨場感が味わえる。視覚より聴覚のみの情報源。怒号が飛び交う場なのか、ヤジるだけの品性のなさを露呈しているのか、聞き手の判断力が試されるメディアだ。

新聞の政治欄にスポーツ欄のような臨場感を望むつもりはなく、要は、どれだけの幅で翌日の紙面に反映しているか、各紙の視点がそこに読み取れるからだ。

「そんなくだらん質問には答えられん」(読売新聞27日朝刊政治面)と発言した亀井静香金融相。詳報した新聞は少なかったが、ラジオで聞いているときは、有名な「バカヤロー解散」(一九五三年、吉田茂内閣)を連想させるようなぶっきらぼうな言い方だった。今では政治家の発言の重さも軽くなり、国会が揺らぐところまでいかないが、急

政治家は矜持を持って



鈴木 雄雅

激な政権交代の期待感が即、失望に変わる側面を持つ危うさがうかがえる。満を持して誕生したとは誰も思わないだろう。そこに一種のノリがあったはずだ。それも「お祭り」であった(12月7日政治面「政治にモノ申す」)。祭りはいつか終わるもの。いや終わりの始まりである。

それにしても、「名護市長に移設反対派」(1月25日朝刊1面)、「首相「民意の表れ」」(同夕刊1面)の後に平野博文官房長官の「斟酌しない」との発言。小沢一郎民主党幹事長をめぐる「政治とカネ」の問題は、メディアが担うべき事実の追求、そしてそれがどこまで真実に迫ることができるか試されているのではないか(23日特報面「問われる「メディア力」」)。

やはりと思つことが出てきた。テレビっ子が集つ民主党閣僚の中には小沢氏報道に苦言を呈し、あるうことか情報源秘匿やリーク批判にまで踏み込んだの発言があった。攻められると、鳩山由紀夫首相同様、いずれもそつう真意ではなかったと神妙になる。が、実は一丸となつて、検証という言葉でメディアを操縦したいようだ。

「Ah ソウ」と外国メディアに揶揄された麻生太郎前首相ばかりでなく、政治が雄弁をもって、政治家たる矜持をもって公共に奉仕するとは、もはや過去の理想なのであるうか。(上智大学教授)

※この批評は最終版を基にしています。

新聞を 読んで